

ブナ材のゆくえ

ブナ林を伐採して、
ブナ材はどのように利用されているのでしょうか？

ブナ林は第二次世界大戦の後半から戦後にかけて各地で伐採され、その面積は急激に減少の一途をたどっている。広大な面積を占めていた新潟県の主なブナ林も、その姿を消してしまった。ブナ林を伐採してもその後積極的に植林し、管理しているならば、狭い日本の国土ではやむをえないとも思われる。しかし、最近ではブナ自然林を伐採しても手を加えることなく、「天然更新」と称して放置している場合が多い。

ブナ材は、その材質と木目を生かして大切に利用されているのであれば、まだ救われる面もある。チップ材として利用されてしまうのは、何としても悲しく思われてならない。チップ工場の前に山積みされたブナの古材を見て、悲しい心境になるのは私一人だけでないと信じたい。200-300年も生き続けてきたブナ材の取扱いとしては、あまりにも安易すぎるのではないでし

ょうか。昨年の秋に遭遇した下の写真のような実態には、再び接したくないものである。

今の世代を支える人達の生れる前から生き続けている生き証人にあたるブナ自然林は、次の世代のためにそっとしておいてあげたい。やがて倒れて腐るであろう老木もそのままにしておき、

行くすえをみとどけたい。まだまだ分からない「からくり」がその林の中に温存されていると思うから、大切にしたい。

多くの方々にブナ材のゆくえに関心を持っていただくと共に、その利用の実態を考えて下されば幸いです。

(石沢 進)



山積されているブナ材